



菅井 茂穂さん
(課長在籍期間 平成14年～15年)



八千代市子ども憲章制定
記念大会



一番印象深いのは、編集に携わった昭和56年11月1日号「暴走族と自動販売機から少年非行を考える」。奥さま版記者と一緒に夜の街に出て、少年たちの話を聞きに行きました。発行する際に、さまざまな反響がありましたが、社会へ疑問を投げかけた特集は、当時、自治体広報誌として新しい試みだったようです。

奥さま版で一番苦労したのは、テーマをどのように設定するかということ。社会情勢を見据え、問題意識を持って考えること、単なるお

知らせにとどまらず、いかに読者の理解につなげていくかを常に考えながら編集にあたっていました。

市民目線、女性目線で社会情勢を見て、自分たちと違った切り口で問題提起していくために、奥さま版・女性版は重要な存在です。

市民活動サポートセンター
開設(平成14年)



この頃の八千代市

アジア初のサッカーワールドカップ開催、イラク戦争勃発など世界の変動が目撃された時期でした。

八千代ファミリー・サポート・センター開設(平成12年)
八千代市子ども憲章制定(平成13年)

当時の女性版



平成14年8月1日号 No.81

「調べてみました 梨のあれこれ」

本市の特産物といえば「梨」と多くの人が答えると思います。この号の女性版では、梨業組合の皆さんにお話を伺い、おいしい梨の選び方や、本市の梨の歴史、栽培の過程などをまとめました。



平成15年8月1日号 No.84

「省エネで環境にも家計にも優しい生活を」

テーマは「省エネ」。平成15年の夏は原発の点検が重なり、電力不安が世間に広がった年でした。「省エネってよく聞くけど、実際はどうしたらいいのか」という話が主婦の間でも話題に。生活を見直して、できることから省エネにチャレンジ!

広報やちよ 女性版

No.133

公募して選ばれた編集委員が企画・構成・編集するページです
編集委員
関口 理子/高松 紀美子/夏戸 夕起

「奥さま版・女性版」を

「広報やちよ女性版」の前身、「広報奥さま版」は昭和56年に始まりました。その後、平成9年に「女性版」と名前を変え、現在に至っています。これまで市民の皆さんの協力を得て、回を重ね、132回を発行しました。

今回はこれまでの担当課長に取材した話や写真で、「奥さま版・女性版」、そして本市の歩みを振り返ります。お問い合わせは広報広聴課 483-1151(代表)へ。

当時の奥さま版



昭和56年11月1日号 No.20

「暴走族と自動販売機から少年非行を考える」

非行で補導される少年の数がどんどん増加していきました。暴走族に話を聞きに行ったり、当時、急激に増えた、成人を対象にした雑誌の自動販売機の実態を調査しながら、母親の目線で少年非行について考えました。

前年の昭和60年に、本市の子どもたちが広島市の平和記念公園などを見学。市民会館前にも平和記念碑を建立することになりました。本市での戦争体験を後世に語り継ぐため、奥さま版でも「米本空襲」を追跡調査しました。



本市の戦争体験記録集
「あの日から」

8月15日号 No.34

心にもあった戦争の傷跡 ～米本空襲を追跡調査～



編集後記



関口記者

代々の奥さま版記者たちが、どんな思いでテーマを選び、記事にしていってか。それを考えることは、女性たちがどんな時代を生きてきたかを考えることです。活字になった一枚一枚がいとおしく、大切なバトンを渡された気持ちになった取材でした。



夏戸記者

今のように情報が溢れていない時代に、市の広報紙がこれだけの情報を市民に届けていたのは、とても面白いと思いました。情報源が少ない時代、各家庭にとっては必要なものだったのではないのでしょうか。



高松記者

本市の奥さま版をきっかけに、当時テレビから取材を受けたことを聞いて驚きました。オイルショックなど、奥さま版は目まぐるしく変遷する時代に生まれ、市民の知りたいことをテーマに、生活者目線を通して歩み続けてきたように思います。